

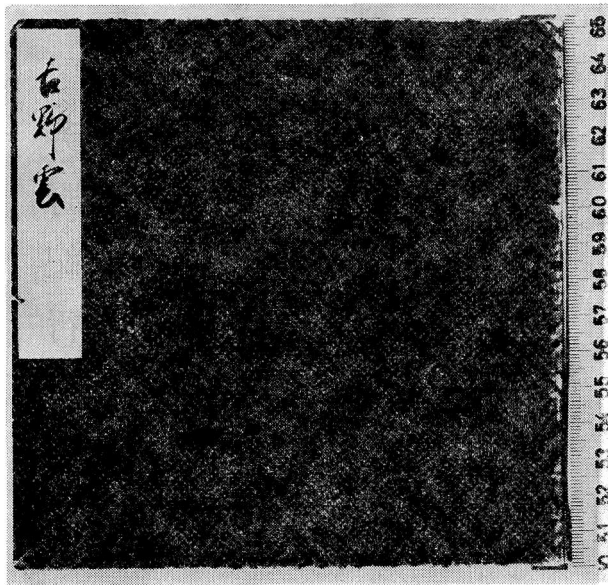
『芳野紀行』

— 影印・翻刻・校異・解説 —

島 原 泰 雄

はじめに

飛鳥井雅章の歌文紀行『芳野紀行』は、現在活字にされたものとして『続々群書類従』巻九所収の「吉野記」があるが、欠歌もあり、良い本文とは言い難い。ここに影印・翻刻により紹介する「吉野雲」（外題）は吉田幸一博士蔵の雅章自筆と認定し得るもので、「有馬の記」（仮称）を含むめずらしい本文である。そして、やはり自筆と認定され、いわば流布本の系統に属する本文を有する「芳野記」（外題）は東洋大学附属図書館蔵により、翻刻文の方に詳細な校異を施した。さらに、その他現在まで調査した十二本の伝本により顕著な校異を後に附記した。そして、解説において、それら諸本について考察し、吉田本・東洋大本の他に雅章自筆の『芳野紀行』が少なくとも三本は存在したであろうとの定推をし、また、雅章の吉野への旅行は承応三年三月十七日であろうと推定した。



凡例

一、吉田幸一博士蔵、雅章自筆「吉野雲」(外題)を上段に影印で載せ、下段に、その翻字を載せた。

一、翻字の横に東洋大学附属図書館蔵、雅章自筆「芳野記」によって、細部にわたるまで忠実に校異を施したが、漢字・仮名の字体は概ね現行活字に従った。

一、右二本の他に、現在まで調査に及んだ十二本の伝本によって、参考までに必要と思われる校異を記した。

この場合、各丁内の漢数字は下段翻字の方の行数を示し、○付の算用数字は解説で各伝本を紹介したその頭に付した番号である。なお、この「参考」においては漢字・仮名・送り仮名の別は、特にそれが本文の異同に影響を及ぼすと思われるもの以外無視した。

一、解説中においても、便宜上、各伝本の書名に換えて、○付の算用数字を用いた。

洛陽三月春如錦といへるもろこし
 の哥・はあれとみよしのゝよしのゝ山の
 うた
 花のにしき・はなとかたち勝・り侍なむ思・ひ
 なる春もいくはるにか・侍りぬらむさらは
 ことしこそとおもひたちて大宮人の
 いとまあるころなれはおはやけの御
 けしきをうかゝひやよひの十日あまり
 弥生・
 七日の空にかの山・にたとり入侍・りぬふもと
 の花・はやゝちり侍るを山のさくらに
 はな 散・ 桜・
 またさかりにてところから折からいへはさら也・
 所・ なり

（二丁表）

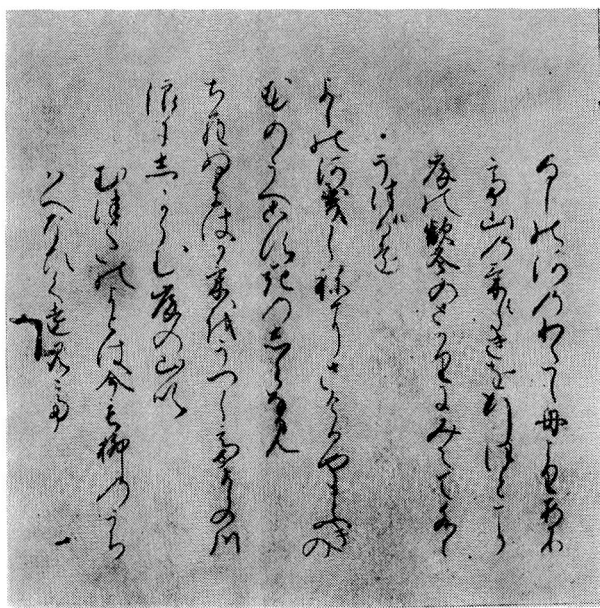
あなはいとる人よあやうし興行花皆好
 されをなむむ所々の興をおもひつゝけ
 るも中々花のあらしとやいふ
 へからむ

前大納言雅章

(二丁裏)

あないする人に尋ね行に逐所花皆好
 されはなむ所々の興をおもひつゝけ
 てはえなきことのはをかたはし
 のへ侍るも中々花のあらしとやいふ
 へからむ

前大納言雅章



（二丁表）

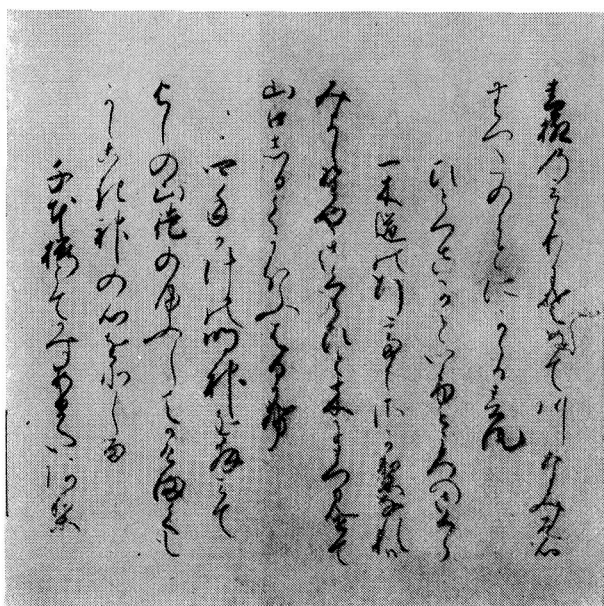
よしの河のわたし舟よりあかり
吉・野川 渡・
て山のけはしきを行ほとに
岨・
岸の款冬のさかりにみえて水に
盛・
うつれるを

1
よしの 河きしねにさけるやまふきの
芳・野 咲・

花のうへこす花・のしらなみ
はな 浪・
2
ちらぬまはかけをうつしてよしの川

浪にしからむ岸・の山吹
波 きし 款冬

むつたのよとは今も柳の・・・うち
六・田・淀・
はへなひくをみて
いと



(二十裏)

3

青柳のみにそめて川なみも
染・河浪・

むつたのよとにかゝる春風・
六・田 かせ

ひとつさかといふところのさくら
一・坂・所・

一木道の行・てにさかりなれば
く

4

みよし野やさくらひと木にまつみせて
御吉・一・先・

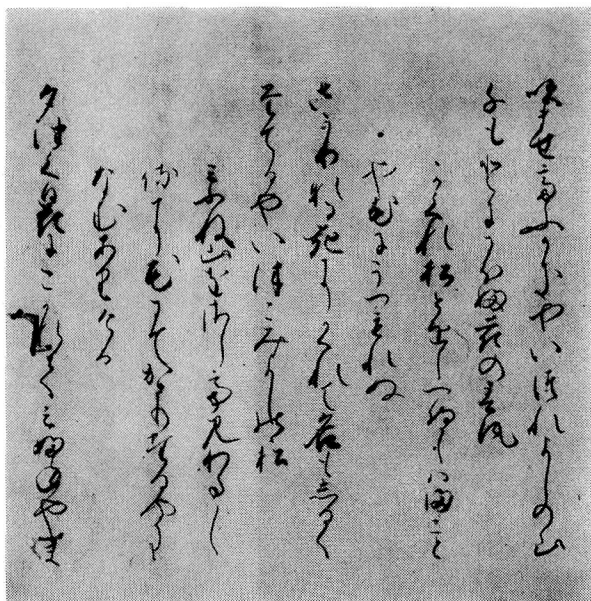
山口しるくにほふはるかせ
春・風・

四手かけの明神を拝・みて
懸・おか

5

よしの山花のゆふしてかけまくも
かしこき神の心をそしる

千本桜とてかすあまたあり
数・



（三丁表）

6

吹ませてふかきやいづれよしの山

千もとにほふ花・の春・風・

はなはなはるかぜ

かくれ松とをしへ侍しはまこと
隠・

や花・にうつもれぬ
はなむ・

7

さかりなる花にかくれて名もしるく
盛・

たてるやいつこみよしの松

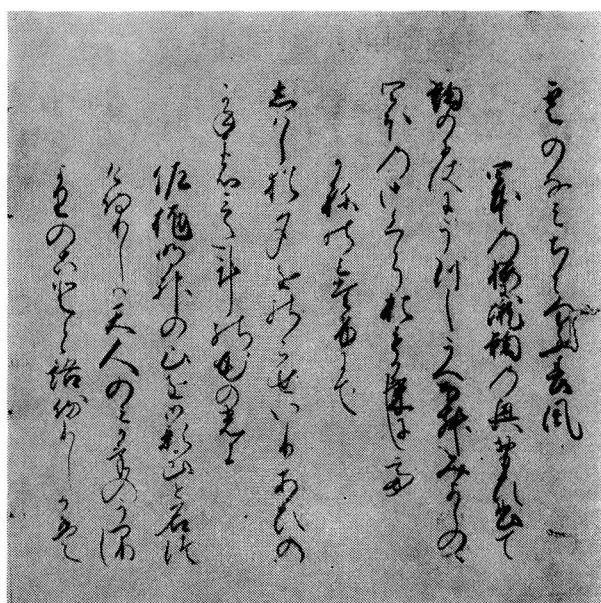
みふね山をさしてみわたし
三般・

侍・に花・にてかさりたるやうに
はな

なむありける
ん有・

8

夕つく日花・にこかれてみふねやま
附・はな山・



(三丁裏)

雲のなみちに匂ふ春・風・
浪・路はるかせ

四本の桜に蹴鞠の興・おもひ出て・
を

鞠のにはうつしうへなむみよしの・
場・植・ん

四本のさくらおもかけにして

かねのみたけにて
金・御嶽・

しはし猶夕・をのこせいらあひの
ゆふへ残・入・

かねのみたけの花の光・に
ひかり

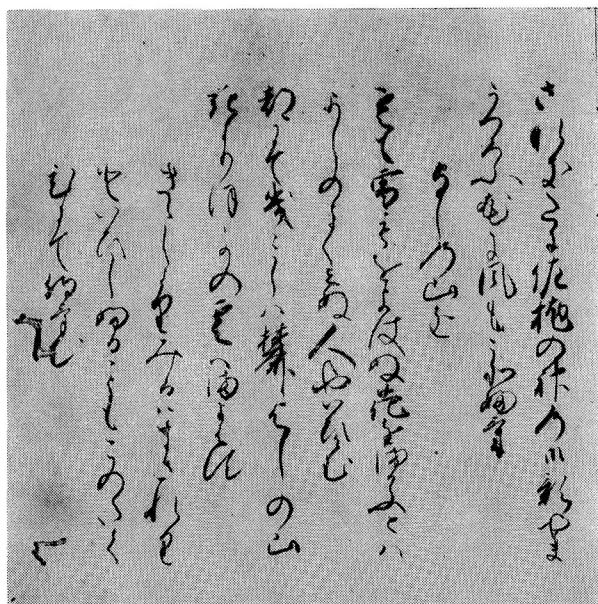
佐抛明神の山を御影山と名つ
な

け侍りしは天人のみかけのうつりし
御影・

よりのことゝ語・侍りしかは
かたり

10

9



（四丁表）

11

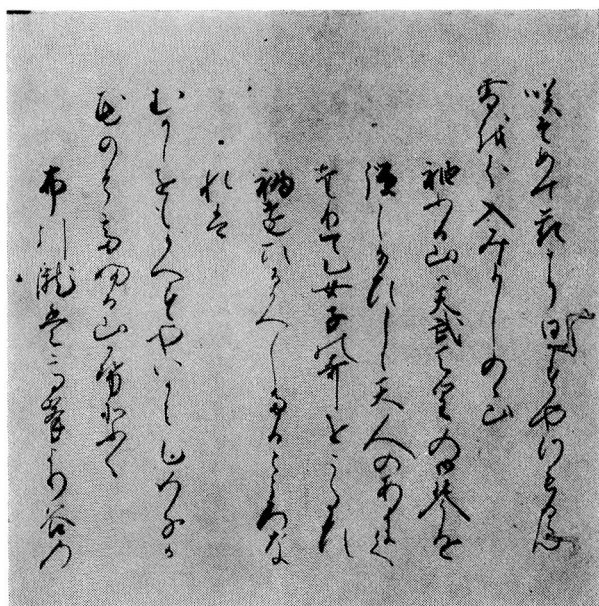
さなきたに佐抛・の神の御影やま
うつろふ花に風もこそふけ
さなき
山・

12

よしの山を
吉・野
雲も雪もをよはぬ花をまかふとは
及・
よしのよくみぬ人やいひけむ

13

都にてきゝしは麓・・よしの山・
聞・ ふもと やま
花・よりほかの雲はまよはす
はな
きゝしよりみるはまされり
聞・
といひしふることもこのたく
此・類・
ひにて・侍けむ
や・なん



(四丁裏)

14

咲そめて花に日かすやつもるらん
数・
 雪を分入みよしの山

神ふる山は天武天皇の御琴を

振・

弾し玉・ひしに天人のあまく

たま

たりて乙女子の哥をうたひ・

て

袖をひるかへしたるところな

所・

れは

15

むかしをもかへすやいかに乙女子か

昔・

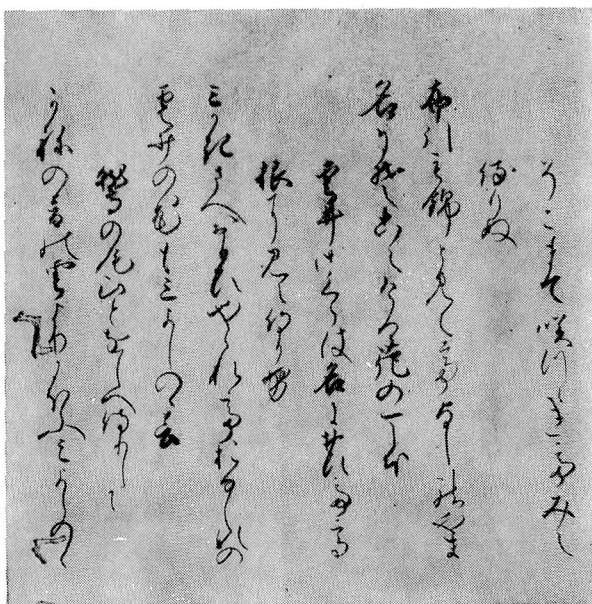
花のそてふる山かせそふく

袖・

吹・

布引瀧は高峰より谷の

桜根



（五丁表）

そこまで咲つゝきてみえ
底・
侍りぬ

16

布引も錦・とみえてよしのやま
にしき 芳・野山・

名にそこえ・ける花・の一・しほ
に はな ひと

雲井さくらは名におひて高
桜・

根にみえ侍りぬ

17

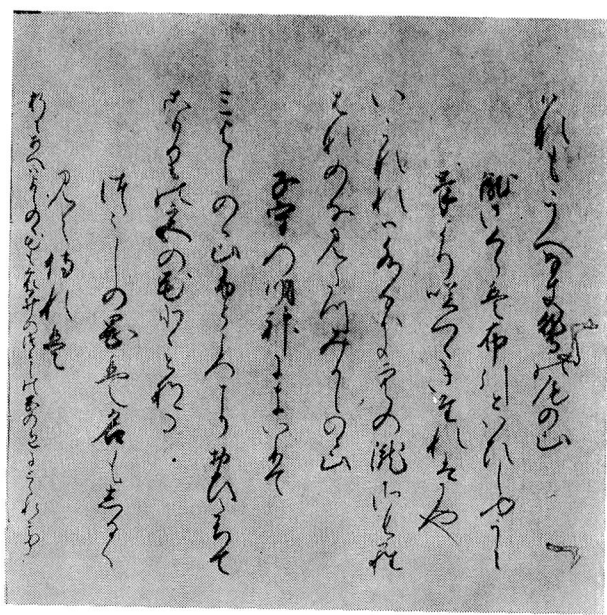
みかきさへおもひやられておなしなの
御階・ 思・ 同・ 名

雲井の花もみよしの春

鷺の尾山とをしへ侍りしに

18

かねの音の雲よりにはふみよしのゝ



(五丁裏)

はなもうへなき鷲の尾の山
花・

瀧さくらは布引といひしやうに
桜・

峯より咲つゝきたれはにや

19
いかなれは水なき空の瀧さくら

はなのなみたつみよしの山
浪・

子守の明神にまいりて

20
みよしの山ふところにおひたちて

御芳・野

こもりの宮の花そことなる
子守・

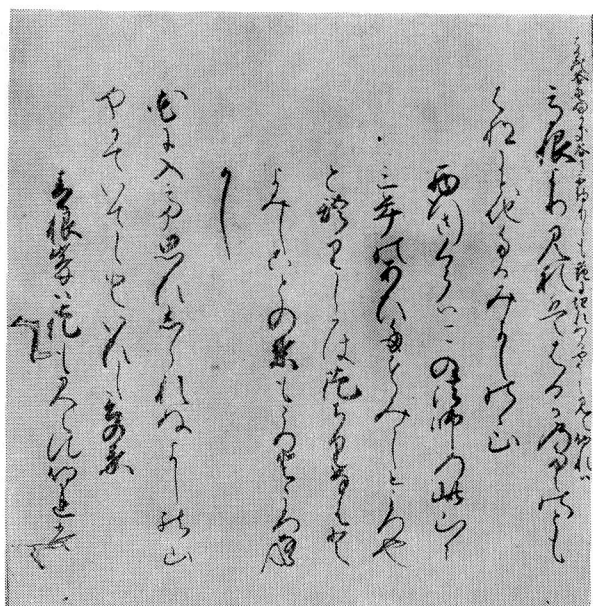
つゝしの岡は名もしるく
躑躅・

みえ侍れは

21
折にあへはよしの花もくれなるの

節

つゝしの岡の色にとられて



（六丁表）

22

はるか谷はふかき谷にて侍りしも
遙・・・・・深・
花に埋・れぬるやうにみえ侍れは
むも
高根よりみればはるか谷のたにのとも
谷・戸
花・はなにとちたるみよしの山

西行さくらはこの法師の此・山に
桜・・・此・この

三年・のあひたすみ・しところ也・
とせ 間・・住居せ なり

と語・りしかは花ちりなはと・
かた 散・

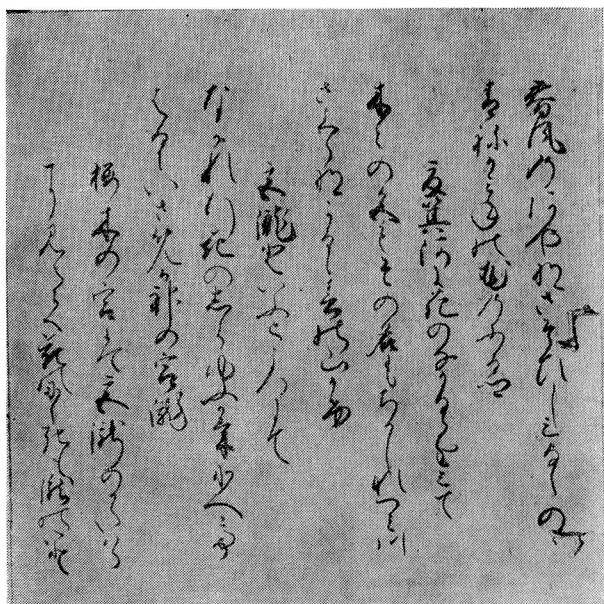
よみしことの葉もこのところ・・ならん
は 所にての事

かし・・・
と思ひ出て

23
花に入て思・ひしられぬよしの山
おも

やかていてしといひし言・の葉
こと

青根峯は花もみえす侍れは



(六丁裏)

24 春風のあやなさをひしきよしのゝ

青ねかみねの花のふる郷
根や

25 夏箕河に花のなかるゝをみて
川

木々の色もその名もちかしなつみ川
に
さくらなかるゝ春の山かけ
はる

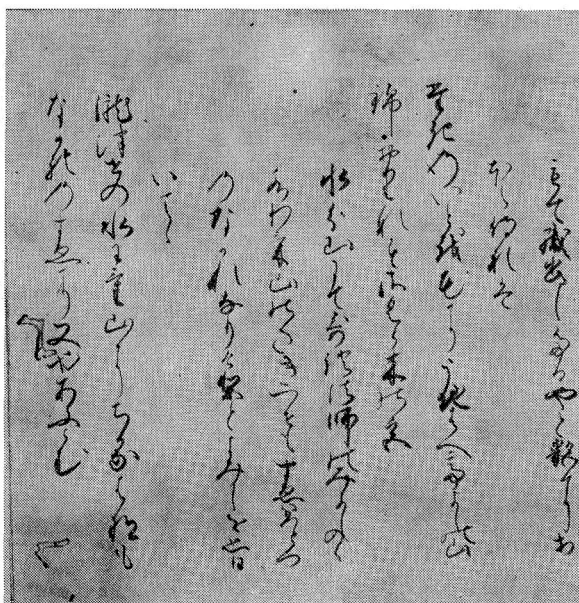
宮瀧といふところに
所

26 なかれ行花のしらゆふかけそへて

はるにいさめる神の宮瀧

桜木の宮は宮瀧のかたはら
みや
高

にみえて花のしきも瀧のいと
はな
錦



（七丁表）

もて織出・したるやと艶にお
ほえ侍れは

27

たきのいとを花にうちはへてよしの山
滝・糸・錦・おりなすさくら木の宮
にしき織・桜・吉・野

水分山にて壽證法師のみよしのゝ

水わけ山のたきつせもすゑはひとつ
分・滝・

のなかれなりけりとよみ・しを思ひ
也・侍

いてゝ

28

瀧つせの水わけ山にちるはなも
分・花・

なかれのすゑに又やあふらむ
んむ

妹背山をなめやりて
 うき中の誰・なみたよりよしのかは
 妹背・の山をなかれ出・らむ
 国栖 所・は・
 節會に笛を吹人のこのところより
 むかしはまいりぬることをおもひ出
 て
 ちりたりと吹・はふかなむくすの笛
 吉・野
 よしのゝ花は今さかりなり
 漸・日もかたふき侍れは麓・の
 やうく

(七丁裏)

29

妹背山をなめやりて

うき中の誰・なみたよりよしのかは
 たか涙・

妹背・の山をなかれ出・らむ
 いもせ

くすといふところにて大内の
 国栖 所・は・

節會に笛を吹人のこのところより

此・

むかしはまいりぬることをおもひ出

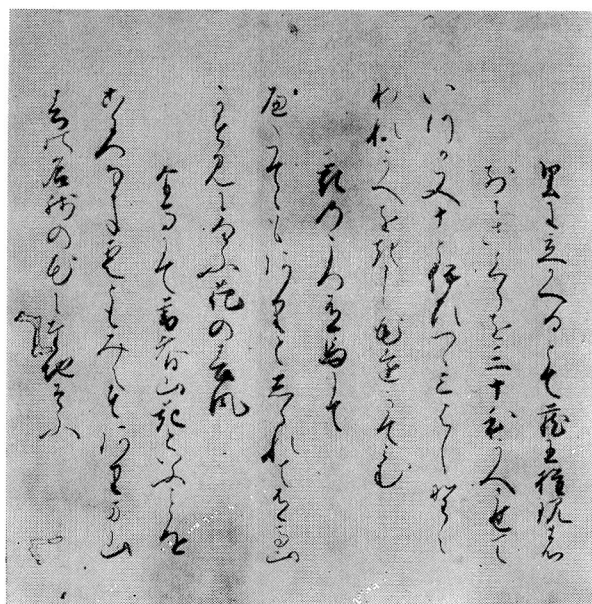
て

30

ちりたりと吹・はふかなむくすの笛
 ふか

吉・野
 よしのゝ花は今さかりなり

漸・日もかたふき侍れは麓・の
 ふもと



（八丁表）

31 里・に立かへるとて蔵王権現の
さと
前にさくらを三十本うへさせ・・て
桜・・侍り

いつか又十といひつゝみよしのに
われうへをきし花をきてみむ
か

花のころ有馬にて（以下東洋大本にはなし）

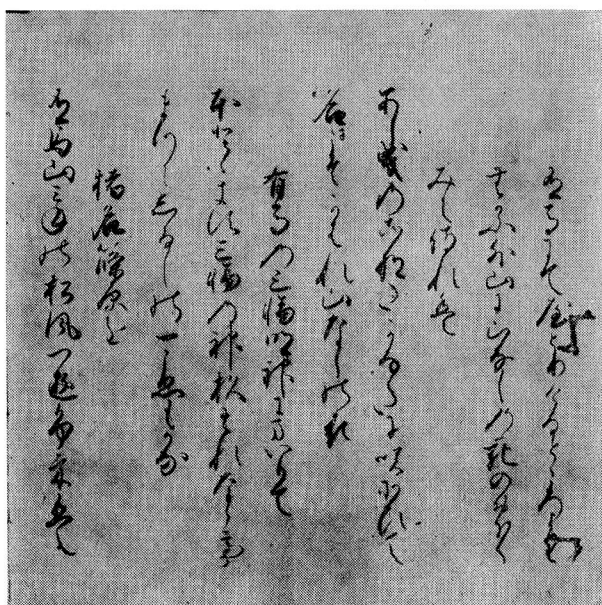
32 へたてゝもありとしられて有馬山

かすみに匂ふ花の春風

有馬にて暮春山花といふことを

33 こゝろなき雲ともみえずありま山

春の名残の花にたちそふ



(八丁裏)

有馬にてやとりけるところより

むかふ外山に山なしの花のおほく

みえ侍れは

34 あし曳のこなたかなたに咲そひて

名にこそかはれ山なしの花

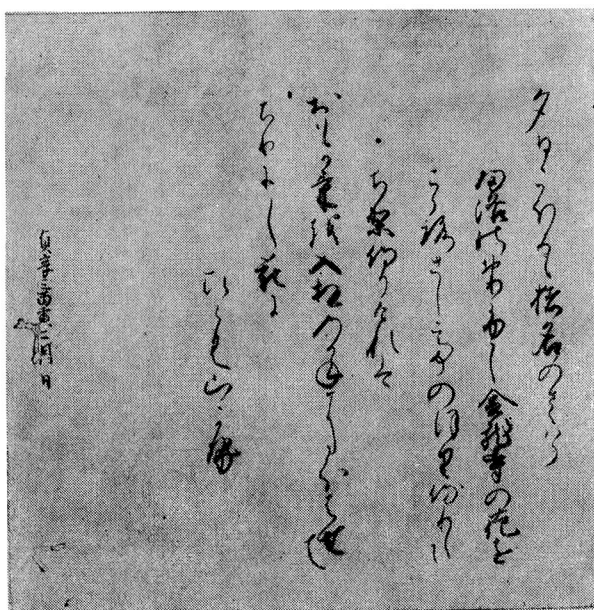
有馬の三輪明神にまいりて

35 ほととす三輪の神杉それならて

まつにしろしの一こゑもかな

猪名篠原を

36 有馬山みねの松風つゆふけは



（九丁表）

37

夕日はこほるゝ猪名のさゝはら

帰路のおりふし金龍寺の花を

こゝろさしてのほり侍りしに

ちり侍りければ

おもかけを入相のかねににほはせて

ちりにし花に

ひゝく山かせ

貞享三丙寅二月日

参考—十二本の伝本による校異—

一丁表

一、「洛陽」↓⑧「洛陽の」△「といへる」↓④「のと・・」。
 三、「にしきは」↓⑪以外「にしきには」△「勝り」↓⑩⑪
 「勝りて」△「待なむ」↓⑩⑪「侍りなんと」。四、「いくは
 る」↓⑪「いくはく」△「侍りぬらむ」↓⑬「なり侍るらん」、
 ⑬以外「なり侍りぬらん」△「さらは」↓⑤「さらに」。七、
 「うかゝひ」↓⑭「うかゝひて」。八、「山に」↓⑫「山のはな
 に」△「入侍りぬ」↓④「入て侍り・」△「ふもと」↓⑪「ち
 もと」。九、「やゝ」↓⑤「・・」。

一丁裏

三、「のへ侍る」↓⑧⑨⑬「いひ侍る」、③④⑤⑥⑦⑩⑪⑫⑭
 「いひのへ侍る」

二丁表

二、「けはしきを」↓全「祖（そは）を」△「行はとに」↓③
 ④⑤⑥⑦⑩⑫⑭「行程・」。五、④のみ一番歌なし。九、「柳
 のうちはへ」↓③④⑥⑦⑫「柳の糸のうちはへ」、⑧⑨⑩⑪⑬
 「柳の糸の折はへ」、⑤⑭「柳のいとうちはへ」。十、「なひく
 をみて」↓④「なびくを・・」。

二丁裏

一、「川なみも」↓⑫「河なみの」。二、「春風」↓⑥⑦「春哉」。
 五、「ひと木に」↓④⑤⑭「ひと木を」。

三丁表

三、「侍しは」↓⑤⑭「侍る・」、⑤⑭以外「侍るは」。四、
 「まことや」↓⑭「まことに」△「うつもれぬ」↓④⑩「埋れ
 ぬ」、④⑩以外「むもれぬ」。六、「松」↓⑨⑩⑪⑬「山」。七、
 「みふね山」↓⑦「み笠山」。八、「かさり」↓⑭「かけり」

三丁裏

一、「雲」↓③「暮」。二、「興」↓全「興を」。九、「侍りし
 は」↓④「侍りしかは」、③「はへる・」。十、「語侍りしかは」
 ↓⑭「語り侍りしに」。

四丁表

一、⑤のみ十一番歌詞書中にあり。八、「まされり」↓④「ま
 される」。十、「にて侍けむ」↓④「にてそ侍りなん」、③⑤⑩
 ⑪⑫「にてや侍りなん」、⑥⑦⑧⑨⑬「にや侍りなん」、⑭「に
 てはへりなん」

四丁裏

四、「天人の」↓③④⑤⑧⑨⑩⑪⑬「天人・」。四、「あまく
 たりて」↓③「あまくたり・」△「うたひ」↓⑤⑭以外「うた

ひて」。八、「いかに」↓④⑤「いかゝ」。十、「布引瀧」↓全「布引桜」。

五丁表

二、「侍りぬ」↓④「侍る」。四、「名にそえける」↓⑨「名にそえにける」。⑨以外「名にそえにける」。五、③のみ詞書を含め十七番歌欠。七、「みかき」↓③以外「みはし」。八、「春」↓④⑧「山」。十、「音の」↓④⑤⑭「音も」。

五丁裏

三、「峯より」↓⑬「峯・」。四、「空の」↓⑧⑨⑩⑪⑬「空に」。六、⑪のみ詞書を含め二十番歌欠。十、「見え」↓⑤⑭「・」。△「侍れは」↓⑦「候」。十一、「折にはへ」↓⑥⑦「節にはへ」。十二、「とられて」↓⑩⑪「とられし」。※④⑧⑨⑩⑪⑬は二十番歌の次に「紅の色にとられてみよしのゝつゝしの岡の花やけたれん」の和歌有。

六丁表

二、「埋れぬる」↓⑧⑨⑩⑪⑬「埋れたる」。六、「すみし」↓全「住居せし」。△、「也」↓⑭「・」。七、「ちりなはと」↓④「ちりなは・」。⑫「ちりなはと」。八、「ところならんかし」↓⑥⑫「所にてのことならんと思ひ出て」。⑦「所にてのことならんと思ひいてゝ候」。⑤「ところならん」。十二、「青根峯は」↓④「青根か岑に」。③⑤⑥⑦⑧「青根か峯は」。

※④のみ二十三番歌の前に「西行 芳野山かて出しと思ふ身を花ちりなはと人や侍らん」の和歌有。

六丁裏

一、「春風」↓④「松風」△「さそひし」↓④「さそひて」、⑥⑦「きそひし」。二、「みねの」↓全「みねや」。三、「なかるゝ」↓⑭「なかるゝ」。△「みて」↓④「・」。四、「色も」↓④「色と」△「名も」↓⑭以外「名に」△「ちかし」↓⑪「ちかく」。五、「山かけ」↓⑧④⑤⑥⑦⑧⑨⑭「山風」。八、「はる」↓⑧⑩⑪⑬「花」、⑨「□」、九、「桜木の」↓⑤⑥⑦⑫「桜木・」、④「桜本・」△「宮瀧の」↓③⑤「高瀧の」、⑥⑦⑫「高瀧・」。

七丁表

二、「侍れは」↓④「侍りて」、⑪「ければ」。三、「うちはへて」↓⑧「をりはへ」。四、「おりなす」↓⑧「をそなす」。五、「壽證法師の」↓⑤⑧⑨⑩⑪⑬⑭「壽證法師の詠に」、④「壽證法師詠に」△④のみ上三句「みよしのゝ水わけ山のたきつせも」欠。七、「よみしを」↓全「よみ侍りしを」△「思ひいてゝ」⑧「・」。十、「あふらむ」↓⑪「あふかむ」。※④のみ、二十八番歌の前に壽證法師の「三吉野ゝ水分山の瀧つせも末はひとつのながれなりけり」の和歌を加える。

七丁裏

二、「うき中の」↓⑥⑦⑨「うき中を」。四、「ところにて」↓⑤以外「ところは」。六、「まいりぬる」↓⑭「まいりたる」△「おもひ出て」↓⑥⑦⑫「おもひて」。※⑧のみ、詞書を含め二十九番歌欠。⑤のみ、詞書を含め三十番歌欠。

八丁表

一、「蔵王権現の」↓⑧「蔵王堂の」。二、「前に」↓④「前にて」、⑩「御前に」△「させて」↓⑤⑥⑦⑫⑭「させ侍りて」。
四、「われ」↓③④⑭「我」、③④⑭以外「わか」。五、「有馬」↓⑤⑭「有馬山」。八、「有馬」↓⑭「有馬山」△「暮春山」↓④「暮春の山」。※④⑤⑭以外五行以降の有馬の紀行欠、従つて、以下④⑤⑭のみにて校異を行う。

八丁裏

一、「有馬」↓⑭「有馬山」△「やとりける」↓④「宿りたる」。
二、「むかふ外山に」↓⑭「むこふの」。三、「みえ侍れは」↓④⑤⑭「みえ侍りければ」。五、「名にこそかはれ」↓⑤「名にそかはれ」、⑭「名こそかはれめ」。六、「三輪明神」↓④⑤⑭「三輪の明神」△「まいりて」↓④⑤⑭「まいりて時鳥をまちて」。

九丁表

三、「のほり侍しに」↓④「のほりしに」。

解 説

雅章は日野弘資らとともに、後水尾天皇の側近として活躍した近世初期の堂上歌人である。古今相伝も後水尾天皇より受けている。

雅章は慶長十六（一六一一）年三月一日、雅庸の三男として誕生、元和五（一六一九）年六月十日（九歳）に元服、同日従五位上侍従となり、寛永十七（一六四〇）年一月五日（三〇歳）に従三位に昇り、延宝七年（一六七九）十二月十二日、六九歳で薨じた。最高官位は権大納言従一位である。

飛鳥井家は『新古今和歌集』の撰者の一人である雅経を祖とする堂上羽林家で、蹴鞠と歌道の家として知られる。雅経より六代の雅世は最後の勅撰集『新続古今和歌集』の撰者である。さらに、雅親（雅世の子）は能筆をもって知られ、その法名をとって栄雅流書道として継承され、飛鳥井家はまた書道の家としても知られるようになる。

雅章は兄雅宣（雅庸二男）の後を承け家督を継いだ。雅経以来十五代にあたる。雅章は飛鳥井家の家道である蹴鞠・和歌・書道のいずれにも秀で、その能筆をもって古典作品の書写もかなりしたらしく、現在でも、雅章筆の書写本が少なからず見られる。無論、和歌や蹴鞠に関する作品も残されている。『芳野紀行』（「吉野記」、「吉野紀行」等別称が多いが、本稿では便宜的に『国書総目録』の見出しの「芳野紀行」を総称とする）は雅章の代表作とも言える作品で、後世、他の作品と合写されたり、叢書に収録されるなどして、広く流布した歌文紀行である。現在活字化されたものとして、比較の見やすいものは『続々群書類従』巻第九に収録されている「吉野記」であろう。しかし、後述するが、その底本とされたと思われる本文は、底本たるにあまりふさわしいとは思えない。さらに、『国書総目録』によれば「むかしの跡河内磯長地方之部付録（柴田長太郎、大正十二）」なるものがあるらしいが、容易に見難い。ここに影印翻

刻したものは、吉田幸一博士蔵の雅章自筆「吉野雲」（外題）であるが、内容は『芳野紀行』である。自筆であることは雅章書写の他の作品や懷紙・短冊等と照合してまずちがいないものと思われる。これは、吉野の紀行に続き有馬の紀行が記されており、後述するが、珍しい本文である。さらに、近頃、東洋大学附属図書館に雅章自筆の『芳野記』（外題）が入手され（現在未整理本）、拝見したところ、有馬の紀行のない、一般に流布している本文であった。そこで、翻刻の方に、この東洋大学附属図書館蔵『芳野記』によって校異を加えた。

次に、吉田幸一博士蔵本（以下「吉田本」と称す）及び東洋大学附属図書館蔵本（以下「東洋大本」と称す）について、一応の書誌を記す。

① 吉田本『吉野雲』

雅章自筆写本一帖。綴葉装。表紙は縦一五・〇×横一五・〇糎、紺青地に薄青（空色）にての記つなき模様に花文を配す。外題は題簽左肩、縦九・〇×横一・七糎、上部に金の菱万字模様を抜き、雅章自筆で「吉野雲」と題す。料紙は斐紙布目入り。墨付八・五丁。一面十行。和歌一首二行書、三十七首。後に別筆にて「貞享三丙寅二月日」とある。さらに、表紙の裏（見返し無）に「鍋島藩小城家旧蔵」とある。

② 東洋大本『芳野記』

雅章自筆写本一帖。綴葉装。表紙は縦一六・二×横一七・四糎、灰青地に金霞引き、それに金銀の梅花文を配す。外題は題簽左肩縦一〇・九×横二・七糎、上部に金銀霞引き、下部に金の唐草模様を配し、別筆にて「芳野記」と題し、その下やや右に「雅章卿」と記す。料紙は斐紙。墨付八・五丁。一面九行。和歌一首二行書、三十一首。首尾に「阿波国文庫」の蔵書印あり。

さらに、参考までに、左記の諸本を調査し、校合した結果、必要と思われる校異を「参考」として、影印翻刻の後

に注記した。次にその諸本について略記する。

〔単独の写本〕

③ 内閣文庫蔵『吉野紀』（一七七―九二五）

袋綴一冊。外題、扉題「吉野記」。墨付七丁。一面九行。和歌一首一行書、二十九首。江戸末期か明治初期写。

〔合写本〕

④ 宮内庁書陵部蔵『芳野一見記行』（黒―一六五）

袋綴一冊。「記行」（水無瀬中將）、「同」（鳥丸光広）、「源氏物語歌」、「蔵山集」と合写。墨付四十四丁の内、一丁表から五丁表までに書写されている。内題「芳野一見記行」の下に「萬治二年春」とあり、さらに、その下やや左よりに「飛鳥井雅章卿」とある。一面十二行。和歌一首一行書、三十九首。「天明四甲辰春書写」の奥書あり。

⑤ 宮内庁書陵部蔵「雅章吉野之記」（鷹―四四三）

袋綴一冊。「不知霄之記」、「新哥集」と合写。墨付五十七丁の内一丁表から四丁表までに書写されている。一面一五行、和歌一首一行書、三十六首（詞書中の一首を含む）。その本文の終りに「戊戌年極月望日」とある。江戸初期写（書陵部図書名検索カードによる）

⑥ 宮内庁書陵部蔵「芳野記」（鷹―四四四）

袋綴一冊。「後水尾院御集百首」、「後水尾院御製名所百首」、「百首詠 鳥丸光広卿点澤庵」、「高尾山紀行」と合写。墨付三十三丁の内二十六丁表から二十九丁裏までに書写されている。一面十一行。和歌一首一行書き、三十一首。江戸後期写。

⑦ 宮内庁書陵部蔵「芳野記」（鷹―四六五）

袋綴一冊。「内侍所御法楽百首統歌」、「百首詠 烏丸光広卿点沢庵」、「高尾山紀行」、及び、本阿弥宗甫の「年のくれをおしむ心」の和歌一首と合写。墨付二十丁の内十一丁裏八行から十六丁表四行までに書写されている。一面十行、和歌一首一行書、三十一首。江戸末期か明治初期写。

〔叢書本〕

- ⑧ 宮内庁書陵部蔵『片玉集』（四四一—二） 卷四十九所収「よしのゝ記」

墨付六十二丁の内二十九丁表から三十二丁裏までに書写されている。一面十一行、和歌一首一行書、三十二首。江戸末期写。

- ⑨ 宮内庁書陵部蔵『扶桑残玉集』（一五二—一五八） 卷四所収「吉野記」

墨付百二十三丁の内十六丁表から二十一丁裏までに書写されている。一面十一行、和歌一首一行書、三十二首。江戸後期写。

- ⑩ 国立国会図書館蔵『今古残葉』（わ―九一八―二） 卷十六所収「吉野記行」

墨付三十七丁の内三十一丁表から三十四丁裏までに書写されている。一面十一行、和歌一首一行書、三十二首。江戸中期写。

- ⑪ 国立国会図書館蔵『扶桑残葉集』（わ―九一八―二） 卷十一所収「吉野紀行」

墨付二十五丁の内四丁裏から七丁裏までに書写されている。一面十二行、和歌一首一行書、三十一首。江戸後期写。

- ⑫ 内閣文庫所蔵『賜蘆拾葉』（二二七―一） 卷七所収「吉野紀行」

墨付五十八丁の内二十七丁表から三十五丁表までに書写されている。一面九行、和歌一首二行書、三十一首。

「吉野紀行」の本文の後に「右一卷亡父一位雅章之所詠也雅章夙歴覽南国之志官事鞅掌無暇果焉一日請于 朝而発駕入芳野古跡美景随見随詠歌儿三十一首時承応三年暮春中浣也而今因或人之求謄写以付之云 元禄三年晚秋下旬 左衛門督藤原雅豊」の奥書が書写されており、その後「右一卷以雅豊卿真跡書写早」とある。江戸後期写。〔版本〕

⑬ 『和歌伊勢海』（架蔵）所収「飛鳥井雅章吉野記」

和泉掾出雲寺元丘新梓行。刊年不明、江戸中期の版か。『和歌伊勢海』は縦一七・一×横一二・三厘（二丁オによる）の匡郭を有し、序一・五丁。目録〇・五丁。本文の六十三丁までは上から五・九厘の所で横罫によって上下に分れる。その上段には「百舂色紙模様百人一首」、「信実謔仙之写」、「和歌詩謔合」、「三曙三名和歌」、「飛鳥井雅章吉野記」、「集外謔仙」が収録され、下段には「名所画図」、「順徳院百首」が収録されている。そして、六十四丁めからは丁を改め十九丁、上下に分れず「染筆相伝之事」が収録されている。すなわち、「飛鳥井雅章吉野記」は五十一丁裏から五十八丁表までの上段に収録されている。一面十二行。和歌一首二行書、三十二首。「吉野記」の本文の後に雅経より雅章までの略系図が付されている。

⑭ 西尾市立図書館（岩瀬文庫）蔵『芳野記』（七五―九四）

袋綴一冊。表紙は縦二三・二×横一五・八五厘、くちなし色無文様で後表紙と思われる。外題は中央、銀地に草画をあしらった板刷にて「絵入雅章吉野記」とある。匡郭に添って切り取った跡が見え、あるいは、原表紙の外題を切り取って題簽として貼ったものか。大きさは縦一五・二×横三・〇厘である。内題は「芳野記」。本文匡郭は縦一五・二×横一二・四厘（序一丁オ（「花のあらしとやいふらん」までを序としている。）による）。料紙は楮紙。紙数十丁。絵三丁三面。柱刻「吉野」及び丁付け。一面十行。和歌一首二行書、三十七首。本文の後に

此吉野記者飛鳥井前大納言正二位藤原雅章卿之詠吟にして秘藏せられるを予竊に書写し開板せしめ早ぬ

元禄十二_{己卯}歲正月吉辰 松栄堂林全

和泉屋茂兵衛

板行

水田や庄左衛門

と、奥書及び刊記が刻されている。

○

雅章の『吉野紀行』は単独の写本、合写本、叢書所収、あるいは版本等様々な形で伝っている。その伝本は『図書総目録』にも多数記載されており、その中には現在見ることでできないものもあるが、国書記載以外にも現存するものと予想されるので、現在までに調査した伝本は現存の半分にも満たないものと思われる。しかし、それでも一応の傾向は見られる。そこで、以下、中間報告として、調査の結果をもとに考え得ることを記してみたい。

表一は現在までに調査した伝本を校合した結果、顕著な本文の異同を中心に作成したものである。これによって概ね次のごとく言い得る。

先ず①によって大きく二系統に分かれる。

甲 ①④⑤⑭

乙 ②③⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬

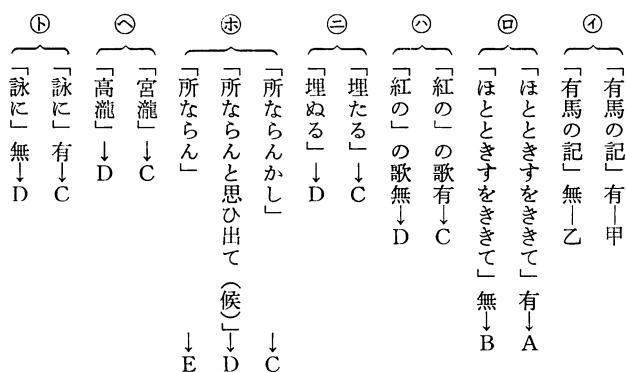
そして、甲類は⑩によってさらに二系統に分かれるようである。

A ④⑤⑭

B ①

表一

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
①	甲	乙	乙	甲	甲	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	甲
㊦	B	/	/	A	A	/	/	/	/	/	/	/	/	A
㊧	D	D	D	C	D	D	D	C	C	C	C	D	C	D
㊨	D	D	D	D	D	D	D	C	C	C	C	D	C	D
㊩	C	D	E	C	E	D	D	C	C	C	C	D	C	C
㊪	C	D	D	C	D	D	D	C	C	C	C	D	C	C
㊫	D	D	D	C	D	D	D	C	C	C	C	D	C	C



表二

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
② と 同じ 箇所	6	—	12	7	12	17	17	1	0	3	2	18	0	10
・ と 同じ 箇所	8	0	6	9	2	2	2	16	18	16	17	1	—	8

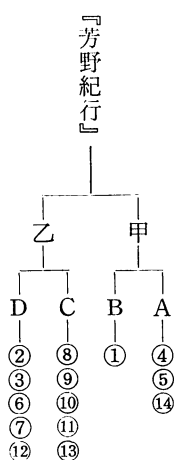
注 ※②と⑬が相異なる異同のみ抽出した。
※罫の中の○の付かない数字は箇所数を示す。

次に乙類は⑥以降により二系統に分かれるようである。

C ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑬

D ② ③ ⑥ ⑦ ⑫

これを図式にすれば次のごとくなる。



以上を念頭において、便宜上「乙―D」類から記す。

「乙―D」類は②の雅章自筆の東洋大本をその祖としている可能性が大きい。

「乙―C」類は東洋大本とは別系統であり、しかも、甲類の系統から単に「有馬の記」を省いたものとも思われる。恐らく、全く別系統の本文を祖としていられると思われる。⑬版本『和歌伊勢海』がこれに属する。そこで参考までに、②と⑬を中心に、細部（例えば助詞「の」の有無等）の異同まで含めて作成したのが表二である。細部にわたれば少し混乱が生ずるものの、表一に比して全体の傾向には変化がないと言えるであろう。

次に甲類であるが、「甲―A」類は⑩によって一応「甲―B」とは別系統と考え得る。しかし、⑥以下を見る時、必ずしも④⑤⑭の祖が同一とは言いがたい。④は天明四年の書写と思われる（239頁参照）が、その内題の下に「万治二年春」とある。⑤は「芳野紀行」の本文の終りに「戊戌年極月望日」とある（239頁参照）。「戊戌年」は雅章生存中とすれば万治元年（一六五八）である。没後とすれば享保三（一七一八）年以後六十年ごとの年であり、さすればそれは書

享年と考えられる。ところで、⑤は書陵部図書名検索カードには「江戸初期写」と注記してあるが、無論雅章自筆ではない。しかし、筆跡その他から見てその書享年が少なくとも享保まで下ると思えず、この「戊戌年」は万治元年と考えてよいかと思う。万治元年は雅章四十八歳である。恐らく、⑤が底本としたものにすでに「戊戌年望月望日」と記されていたのではなからうか。結論的に言えば、万治元年の雅章筆の「芳野紀行」があつて、⑤はこの系統の書写本であらうと推測する。ただし、「望月（十二月）」とあり、吉野行きは三月であつて、少くとも初稿は吉野行きからさほど時間を経ずして記されたと思われるので、この⑥の祖となつたものは、雅章自身の書写本乃至は浄書本であらうと思われる。さすれば、少なくとも『芳野紀行』の成立は万治元年春以前と考えられるので、④の「万治二年春」も書享年となるが、これも、雅章自身記したものが④にまでそのまま謄写されたのではなからうか。つまり、雅章は万治二年春にも「芳野紀行」を浄書したと考えたい。この推測が許されれば、吉田本、東洋大本の他に万治元年自筆本、万治二年自筆本が存したことになる。⑭の版本はその奥書に「前大納言正二位」とあり、これは明暦元（一六五五）から延宝五（一六七七）年にあたる。従つて、「松栄堂林全」なる者が竊かに書写したのは少なくとも明暦元年以降と思われるので、万治元年自筆本、万治二年自筆本のいずれもその原本の可能性はあり、全く別の自筆本であつたことも考えられる。ただ、現時点では、内容的には⑤に最も近く、⑤の祖と考え得る万治元年自筆本の可能性が最も強い。実は、さらに「乙―C」の祖となる自筆本の存在も考えているので、雅章は少なくとも五度にわたり、自身『芳野紀行』に筆を染めたと推察する。

例えば、宮内庁書陵部蔵『日野弘資詠草控』（自筆）を見ると、弘資自身の注記に、「酒井雅楽頭望之書遣吉若州取次」等、人の依頼により自歌を浄書して与えたという記述が屢々見える。義理の場合もあるが、多くは謝礼を意識してのことと思われる。当時、堂上歌人として、しかも能筆家として著名であつた雅章にもそのような依頼があつた

ことは想像に難くない。依頼によつては古典作品を書写して与えることも、あるいは自歌を短冊や懐紙に書いて与えることもあったであろう。そして又、自作の『芳野紀行』も、依頼によつては浄書して与えることもあったのではないか。その意味では、『芳野紀行』は量的にも手頃な作品と言える。そして、雅章は浄書の折ごとに、熟考してかしまぐれか、本文に手を加えたのではないか。伝本の異同は、無論、後人の書写の段階での誤写や、あるいは校合が行なわれるなどして生じたものも多いであろうが、雅章浄書の折の間違いや意識しての改竄によるものも少くないように思う。

次に「甲—B」の吉田本について記す。吉田本は表一でも知り得るが、さらに細かい異同まで含めると、十四本の伝本の内吉田本のみ異同の見られる箇所が十二箇所あり、やや特異な様相を呈している。小字の書き込みが見える（影印参照）が筆跡は同筆で雅章自身の書き込みと思われる。あるいは、依頼を受け浄書したが、書き損じたため手元に留め置いたのではなからうか。ただ、この吉田本に問題がなくはない。本文は筆跡から推して雅章筆に違いないと思うが、終りに「貞享三丙寅二月日」とあって、貞享三（一六八六）年は雅章没後七年にあたる。小字の上本文とは書体が異なるので断定するに多少の戸惑いはあるものの、雅章筆の他の作品と詳細に比較検討した結果、本文とは別筆と判断した。恐らく、後人の関了あるいは校了等の日付であろうと思うが、なお御助言御批判を賜わりたく思う。又、「前大納言雅章」とあり、雅章が権大納言を辞したのは明暦元（一六五五）年であるから、吉田本を書写したのは少くとも明暦元年以降である。

次に成立、換言すれば雅章の吉野行きの年時について考察する。

本文冒頭に「やよひの十日あまり七日の空にかの山にたとり入侍りぬ」とあって、吉野に着いたのは「三月十七日」である。三十一番歌の詞書「漸日もかたふき侍れは」まで一日とすれば、その日は、その麓の里に宿したことになる。

そして、翌日帰京したとすれば一泊二日の行程である。又、吉野から続いて有馬に回った場合、有馬に何日滞在したかにもよるが、一〜三日（本文をそのまま信ずれば一日の滞在となる）の滞在とすれば長くても約一週間程の旅行ではなかったかと思う（深草元政が寛文七年有馬に行く時、京深草から有馬まで二日で行っているが、およそその目安になるであろう）。そして、帰京して間もなく纏めたとすれば、三月下旬の成立となる。しかし、何年であるかは現存の自筆本からは知り得ない。その手掛りとなるのは⑩に書写された奥書である（24頁参照）。この奥書によれば、雅章の吉野行きは「承応三年暮春中流」である。これは現在調査した伝本で一番若い年時を含んだ奥書である。「右一巻以雅豊卿真跡書写早」とあり、雅豊の奥書は「元禄三年映秋下旬」とある。雅豊は寛文四（一六六五）年雅章の末子として誕生、寛文十（一六七〇）年元服昇殿（七歳）、元禄元（一六八八）年従三位（二十五歳）、正徳二（一七一二）年四十九歳で薨じた。最終官位は従三位権中納言である。兄（雅章二男）雅直が寛文二（一六六二）年二十八歳で薨じたため―元服以後ではあるが―後を受けて飛鳥井家の家督を継いだ。従って、雅豊は雅章の遺品も含め飛鳥井家の所有物一切を受け継いだのである。又、雅章の没年の延宝七（一六七九）年は雅豊十六歳であるから、雅章から直接話を聞く機会もあったであろう。従って、雅豊が雅章の「吉野紀行」の事情に通じていたとしても不思議はない。さて、承応二（一六五四）年の雅章であるが、四十四歳、権大納言従二位（この年の正月五日正二位宣案、十二月二十四日正二位となる）である。そして、二月十一日春日祭上卿参行、四月四日賀茂伝奏と二月から四月にかけてすこぶる多忙であり、三月中旬はまさに忙中に閑を得た時と言える。これは「芳野紀行」本文冒頭の「大宮人のいとまあるころなれば」及び雅豊奥書中の「缺掌無暇果一日請于朝」に合致する。従ってこの奥書の信憑性は強いと考え得る。因に雅章は翌明暦元（一六五五）年正月には権大納言及び賀茂伝奏を辞しており以後要職には就いておらず、大宮人としては、いわば閑職にあった。従って、雅豊の奥書を信じて、雅章の吉野行きは承応三年三月十七日と考えてよいかと思う。しかし、有馬行きが

吉野から続いているものかどうかは依然不明である。たとえ、一連の旅行でなかったとしても⑤にはすでに「有馬の記」が含まれているから、万治元年雅章自筆書写本の存在が認められれば、有馬行きは万治元年以前であったと考え得る。

ところで、⑫は「乙―B」類で②の東洋大本の系統であるので、「雅豊真跡本」もこれに属する。因に⑫は、表二からもその一端は窺えるが、さらに細かく、漢字や送り仮名の一致まで含めて比較する時「乙―B」類の内でも東洋大本に近い本文である。

最後に、『続々群書類従』巻九所収の「吉野記」は、和歌の欠漏から漢字仮名、送り仮名の異同まで含めて③とは同一で、③を底本としたかのようである。③は「乙―D」類で系統としては悪くないが、詞書を含めて十七番歌・二十九番歌を欠くもので、少なくとも現在管見に及んだ伝本の内では最も粗雑な本文であることを付記しておく。